

宮崎県総合博物館 第2期中期運営ビジョン評価表（平成28年度）

評価欄の数値は4段階評価数値

内部評価 4…指標を大きく上回った 3…指標を達成できた 2…指標をやや下回った 1…指標を大きく下回った

外部評価 4…期待以上できた 3…ほぼ期待どおり 2…やや期待を下回る 1…改善が必要

(1) 調査研究

項目	評価指標		28年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価・改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①調査研究方針・計画	達成率	100%	75%	<ul style="list-style-type: none"> ・学芸課職員が個別に研究テーマを設定して行う個別テーマ調査研究は、単年度で完了できるものをはじめ、2～5年の複数年にわたるものや水系別総合調査研究の内容を兼ねるものなどがあるが、概ね設定した計画のとおりを実施するとともに、成果を研究紀要に公表することができた。 ・小丸川水系に係る総合調査研究については、4年計画の2年目として、概ね計画していた内容の調査を行うことができた。 ・なお、一部の部門において、他の業務との調整がつかず当初の計画どおりに実施できなかったものもあったので、今後は調査項目等の必要な見直しを行いながら、引き続き調査研究に取り組んでいく。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ・多いとは言い難い学芸員のスタッフで、多岐に渡っての研究テーマに取り組んでいる。成果についても計画どおりに実施できている。また、定期的に発表していることを評価する。 また、小丸川水系に係る総合調査も順調である。何より、各分野において宮崎県にとって貴重な研究者としての地位を確立している点は評価できる。ただ、4でも良いと考えるが、外部から推し量れない点があることから、自らの採点を尊重して3とする。 ・調査研究方針・計画の実績の数値については、毎年75%が続いている。評価指標が現状のままで良いのかなど、検討されてはいかがか。 研究紀要と地域調査報告書の刊行、報告会の開催が堅実にこなわれていることは評価できる。 ・平成28年度は、平成27年度に始まった「一級河川の総合調査研究（4年計画）」の2年目として「小丸川水系の総合調査」が行われた。宮崎県の一級河川水系（北川水系・五ヶ瀬川水系・小丸川水系・大淀川水系）は、それぞれの水系流域の地質・岩石の構成に際立った特徴があり、それぞれの水系は、県の北端部に位置する北川水系から、五ヶ瀬川水系、小丸川水系、県の南部に位置する大淀川水系へと、おおまかに県域を分割するように帯状に位置し、各水系はそれぞれまた共通して、東方向への流路を持ち、日向灘に河水を注いでいる。従って、宮崎県における水系別の総合調査は、気候帯に調和的な水系の位置配置や、水系の流域を構成する地質・岩石の相違が、水系流域の「動物相」・「植物相」・「居住者の文化形態」に特徴的な差異を与えていることを解明し、これによって、生物や人間文化の始原的な発展の解析に一步迫るような成果が得られることが期待される。宮崎県総合博物館の「水系別の総合調査研究」は、他の地域の便宜的な水系別調査とは本質的に異なった側面を有していて、その成果が期待される。 ・学芸員の真摯な研究に敬意を表する。 ・調査研究報告会については、限られた時間での調査研究の発表会であったものの、調査研究の進め方の基本や専門分野外からの素朴な疑問も多くあったと思われるがほとんど他の調査研究に対しての感想や疑問等が出されなかったのは、少し残念であった。お互いに切磋琢磨するような気概も欲しいと思った。調査研究について、忙しい中での日々の努力に感謝したい。 	3
②調査研究成果の公表	研究紀要の発刊	年1回	研究紀要 1回 県南地域 調査報告書 1回	<ul style="list-style-type: none"> ・「研究紀要第37輯」及び「県南地域調査報告書」の2つの報告書を発行し、本県の自然史、歴史等の解明に一定の貢献が期待できたと考える。なお、「県南地域調査報告書」の内容については、平成28年度の特別展「ここがわかった！県南調査展」において公表した。 ・今後も各種の調査研究成果を、報告書等により、県民に適時適切に提供していく。 	3	3		
	調査研究報告会	年1回	1回	<ul style="list-style-type: none"> ・3月に職員9名が調査研究の結果や収蔵資料に関する内容、映像資料の作成などに関する内容についての報告を行い、博物館協議会委員や博物館友の会会員にも参加いただいた。 	3			

(2) 収集・保存

項目	評価指標		28年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価・改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①収集・管理	資料の収集	2,500点 (年平均500点)	10,821点	<ul style="list-style-type: none"> 資料の収集、図書・文献の収集、デジタルデータの収集、デジタルミュージアム登録数については、年平均の目標値を上回るとともに、内容についても、動物部門では世界最大の蝶として知られるアレキサンドラトリバネアゲハの乾燥標本や県内の干潟に生息する底生生物液浸標本、歴史部門では日本のシベリア出兵に関係する黒木親慶文書といった、学術的に非常に価値の高い資料を収集することができた。 収集資料の整理・登録数については、年平均の目標値に達しなかったが、これは昨年度までで第2期の目標値を上回っていたことから、平成28年度は未登録資料の整理・登録のための準備を中心に行ったことによるものである。 平成29年度も引き続き館外調査を計画的に実施しながらデジタルデータの収集に努めるなど、資料の収集に取り組み、登録を進める。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 資料の収集・管理については、概ね年平均を達成し、学術的に価値の高い資料を収集できた。資料の保存は、計画どおり実施し、修復についても随時実施している。保存スペースを今後どのように増やしていくかは、ハードの面での課題と思われる。 未登録資料の整理・登録の準備を進めていることは、良いことである。すみやかな進捗を望む。資料の修復は、博物館の重要な役割のひとつであり、近年は文化財保存の観点からも注目されている。館展示物に限らず、今後も取り組まれることを期待している。 資料の収集・管理についての目標値は、あくまでも目標値なので、その数値にとらわれることなく、あるべき方向に進んでいただきたい。 	3
	図書・文献の収集	5,000点 (年平均1,000点)	1,265点					
	デジタルデータ (写真・映像等) の収集	5,000点 (年平均1,000点)	1,047点					
	収集資料の整理・登録	4,000点 (年平均800点)	564点					
	デジタル・ミュージアム登録数	1,000点 (年平均200点)	244点					
(合計)	(年平均3,500点)	13,941点						
②保存	燻蒸	年1回	1回	<ul style="list-style-type: none"> 本館では平成23年度からIPM（総合的虫菌害管理）の考えを取り入れた資料保存に取り組んでおり、平成28年度も全職員によるIPMウォッチング、学芸課担当職員によるトラップ調査などを計画どおり実施することができた。 また、9月の燻蒸期間には、収蔵庫内の燻蒸及び展示室内の簡易燻蒸（殺虫等処理）を計画どおり行った。その際、常設展示室内の虫菌害発生のおそれがある資料についても、収蔵庫に移動して燻蒸し、殺虫・殺卵・殺カビ処理を行った。なお、燻蒸期間中は館外でのガス漏れ計測ポイントを増やすなどの万全の安全対策を行った。 	3			
	簡易燻蒸（殺虫等処理）	年1回	1回					
	トラップ調査	年12回	12回					
	IPMウォッチング	年12回	12回					

(3) 展示

項目	評価指標		28年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価・改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①入館者数	本館入館者数	80万人 (年平均16万人)	107,720人	<ul style="list-style-type: none"> 本館の入館者数については、10万人台はキープできたものの、本計画の目標値はクリアすることができなかった。この原因としては、平成10年度のリニューアルから18年を経過していることなどが考えられるが、現在、常設展示室における適時適切な資料入替えや年間を通じた魅力あるロビー展の開催、展示解説員の資質向上によるサービスの向上、様々な機会を捉えた情報発信を行うとともに、エントランスホールにおいて、本館を世代間交流の場として活用していただくためのミニコンサートの開催や博物館スタッフを身近に感じていただくための職員ミニ写真展の実施などの新たな取り組みも行っており、今後も引き続き、集客力の視点も踏まえた魅力ある企画を展開していく。 また、近年、本館を訪れる学校数が減少傾向にあることから、本館の有効な活用策等を具体的に伝えるため、教職員へアプローチを強めていく必要がある。 	2	3	<ul style="list-style-type: none"> 入館者数は、クリアできなかったが、新たな取組み等、努力は評価しても良いと思う。更なる学校へのアプローチの他、生涯学習では、各地域で高齢者教室等が開催されていて、学んでいる高齢者が多く、そちら方面の機関への呼びかけをしてみたら良いと思う。民家園の補修工事の終わった来年度は、期待したい。常設展は、展示替の目標を大きく上回り、努力を高く評価したい。特別展は、さまざまな分野で開催されて、来場者の満足度から見て高く評価したい。 入館者数について、目標値を達成することを目指しているならば、影響を与えている要素が何かを明らかにした上で、具体的な方策を立てるべきではないか。例えば、年報の41頁の表を見ると、ここ10年の合計数は、1年おきに増減があるようだが、何か要因が考えられるか。この変動を除けば、平成22年度以降、ほぼ横ばいになっているが、それ以前とどう違う点があるのか。口蹄疫の影響があったとしても、その後回復しないのは、別の要因があるのではないかと。また、この表では個人の入場者が平均で全体の86%を占め、この増減が合計数に直接結びついているので、個人入場者をいかに増加させるかが鍵と考えられる。一方、団体では最も多い小中学生でも1割に満たず（平均7.4%）、利用学校数の増減は、これまでのところ入館者数には大きな影響を与えていない。以上は、人数の話であるが、特別展の入場者数などは、ブームに左右されがちであり、公立の博物館の役割として、人気に関わらず重要な物の展示普及を第一に考えていただきたい。ただ、そのような展示の貴重性や面白さについて、十分な広報を行って関心を高めることをお願いしたい。夏休み時期に行われる特別展を平成26、27年度（妖怪展、ふしぎ生物ワンダーワールド）と拝見して、いずれも大変興味深い内容だったが、ターゲットとする年齢層がやや中途半端な印象を説明などに感じた。子どもは子どもなりに、大人も大人なりに楽しめる展示方法を、さらにお考えいただきたい。 	3
	民家園入園者数	25万人 (年平均5万人)	46,648人					

②常設展	展示替等回数	年5回	16回	<p>・自然史展示室では、地質部門のシダ類の葉の化石（クラドフレビス）、ロボク（トクサ類）化石の展示替えを、歴史展示室では、ロビーケースを使った刀剣・刀装具類の定期的な展示替えや要望の多い「木造阿弥陀如来坐像」（県指定文化財）の展示替えを、民俗展示室では、佐土原人形の展示替えを行うなど、昨年度と同程度の展示替えを実施することにより、観覧者の興味喚起や収蔵資料の活用に努めた。</p>	4	<p>・入館者数は昨年度よりもさらに減少しているため、分析する必要がある。一方で県民の10人に1人弱が訪れている事実はある。（延べ人数であれ）学校数の減少傾向に対して、校長会や教職員研究大会等との接点を探り、学校行事や授業研究に結びつける手立てを考えていく必要がある。民家園も体験講座等で好評のようだが、これにエコパークや世界農業遺産等も関連づけて何か発信できると良いと思う。常設展は展示替え等も度々されて感謝している。歴史展示室の中の「発展しつづける宮崎」のコーナーに該当する大正・昭和時代のものが、結構地方には残されているし、軽々に処分されている。寄贈の呼びかけ（無論、即展示品となるかわからないが）等もあって良いのではないかと考えている。</p>
③特別展	実施回数	年3回	<p>主催事業 4回 貸館事業 1回</p>	<p>・主催事業として、巡回展「第36回SSP展」、実行委員会形式で開催した「ワクワク！ふしぎ生物ワンダーワールド」、本館が独自に企画した「賀来飛霞のみた自然と歴史」展、地域別総合調査の報告展である「ここがわかった！県南調査展」の4回、貸館事業として、「キャシー中島 楽園のキルト展」（主催：MRT、宮日）の1回を実施し、目標をクリアできた。</p> <p>・また、主催事業に係る来場者の満足度は、アンケートによると「良かった」以上が「第36回SSP展」では93%、「ワクワク！ふしぎ生物ワンダーワールド」では91%、「賀来飛霞のみた自然と歴史」では94%、「ここがわかった！県南調査展」では84%、全体では92%となり高い評価をいただいた。</p>	4	<p>・特別展の「ここがわかった！県南調査展」は、3カ年に亘る総合調査の成果を標本や写真、剥製、解説パネルで広く県民に披露した企画展である。展示は地味だが調査時点での生物の個体数などの確認、絶滅危惧種に指定されている個体の高密度生息などの確認など学術的に貴重な調査と言える。これら成果を展示することは博物館の目的そのものであり、今後の計画的実施を期待する。今まで賀来飛霞関係の企画展があったか記憶がないが、今回の「賀来飛霞のみた自然と歴史」展を企画されたことを高く評価する。展示は前半が延岡藩関連の史料展示、後半が「高千穂採葉記」関連で構成され、タイトル「賀来飛霞のみた自然と歴史」からは焦点がずれた感があり、どちらかと言えばサブタイトル「延岡藩と高千穂採葉記」の展示であった。賀来飛霞が描いた植物の絵が展示してあったが、本草学者は精密な絵を描き植物などの特徴をとらえていたことが分かる。「高千穂採葉記」は動植物などの記録書というだけでなく、当時の風俗についても触れてあり民俗的に貴重な記録である。例えば、現在も日之影辺りで食べるアザミ、ウバユリ、救荒食のコベ、一粒の米も入っていないトウモロコシ飯やアワ飯など当時の食習慣、今も盛大に行う百済王族の師走祭、座頭神祭、クルソン（黒尊石）などの祭祀、他に椎茸や茶栽培、製茶などの記述、梁やハチウト、焼畑などの挿絵、梁は延岡アコ梁と現在と同じ構造であることなどなど。民俗や動植物の担当も加えた企画にすると「高千穂採葉記」に焦点が当たり、幅広い展示になったのではないかと考える。</p> <p>・特別展、ロビー展において多彩な催しがあり、色々な方面から楽しめる企画だと思われませんが、なかなか企画が幅広く浸透していないように思う。もう少し宣伝を考えて多くの方々に気楽に来場してもらえるような雰囲気づくり等があればいいと思う。</p> <p>・特別展賀来飛霞展では、貴重な資料と共に、県北地域の自然と歴史に対する新たな理解を深める機会となった。これに関して県北中心とした夕刊デイリー等の連載シリーズは良かったと思っている。入館者と直接の結びつきは、把握できていないが、博物館の持つ財産・情報発信の点では大変良かったと思っている。県南特別展での内容も工夫されていた。小倉処平に関するものもあり、大変興味をひいた。また、これまでの他地域の分も脇に展示されており、博物館の幅広い活動やこれまでの蓄積を知らせる機会ともなり、良い事だと思った。</p>
④ロビー展	実施回数	年12回	16回	<p>・寄贈していただいた新収蔵資料を展示したり、資料修復に伴って自然史展示室のサイカシア化石を一時的に移動させて展示するなど、分野や担当者のバランスを取りながら計画的にロビーを活用し、全16回実施した（特別展関連展示1件、各部門の企画展11件、広報推進会議の企画展等2件、展示解説員の展示1件、博物館友の会の展示1件）。</p>	4	<p>・貴館独自の企画展「賀来飛霞のみた自然と歴史」は良い展示であった。担当者の研究と努力に敬意を表したい。入館者数の評価根拠について、目標値をクリアできなかった原因にリニューアルから18年経過したことをあげ、また、対策として常設展の資料入れ替え等の展示方法を示されている。しかし、年報の41頁の「過去10年間の利用状況の推移」の「ア 本館入館者数」表において、合計数から特別展観覧者数を引いてみると、平成21年の17,905人を除けば3万人台をキープしており、最多は平成23年の42,820人であるが、平成28年もこれに次ぐ42,747人の多さである。平成28年度の常設展は、実は大健闘したのではないかと。アの表によれば、入館者数16万人を達成する対策とは、相当に人目を引く特別展を次々と開催することにありそうだが、それでは貴館の基本理念や活動方針から離れてしまう懸念が大きい。そもそも16万人という数値目標の妥当性を検討されてはいいかであろうか。</p>

(4) 教育普及

項目	評価指標		28年度実績	内部評価		外部評価		
	内容	目標値		評価・改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①学校教育支援	学校受入校数	年200校	175校	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験の受入れ学校数については目標をクリアできたが、他の項目については達成できなかった。 ・授業支援は宮崎西高等学校附属中学校と宮崎大学日本史ゼミへの対応、職員研修の受入れは宮崎北高等学校SSH、都北小・中学校科学展審査の指導・助言を行った。 ・今後は、校長会や職員研修会、来館された教職員など、様々な機会を通じて、博物館の学校支援の取り組みメニューや有効性について周知を図る。 	2		<ul style="list-style-type: none"> ・内容はすばらしく、広報活動など情報発信は、工夫してよく行っている。内容によっては、マニアックなものもあるため、多くの人に対して興味、関心を高めさせることは、やや難しいと思う。そのためにも、現場の声（特に小学生や教員）から聞きとり検討してみるのもよいのではないかと。また、年間パスポートや回数券を作るとリピーターは増えると思う。年1回「美術館、図書館、博物館、芸術劇場」を利用できるよう教育委員会の方で、予算化してくれると遠方の学校は利用しやすくなる。館内を飛び出して県北会場、県南会場、県西会場で一週間ほどの展示などが可能なら、全地域の子どもの目に触れる機会がつけられるのではないかと。 	3
	資料貸出し	年10校	9校					
	授業支援	年10校	2校					
	職場体験受入れ	年5校	6校					
	職員研修受入れ	年5校	3校					
②展示解説	実施人数	年10,000人	9,469人	<ul style="list-style-type: none"> ・展示解説員による定時解説及び通常解説を受けた人数については、目標の1万人に若干及ばなかったことから、今後は来館者への声かけをしっかりと行っていくとともに、利用者の興味や関心を引き出すような工夫をすることにより、リピーターの増加を図る。 	2		<ul style="list-style-type: none"> ・どの項目においても、目標値に近いあるいはそれを大きく上回る数値が得られ、より多くの対象者に対する配慮と努力、そして研究の成果の表れであると思う。興味・関心、年齢、その他いろいろな段階、状況に応じた対応的努力がうかがわれる。何らかのきっかけで、学習の広がり、生活の豊かさ、楽しみにつながるような仕掛けや工夫を今後も期待したい。 	
③博物館講座等	主催講座（地域講座含む）	年30回	35回	<ul style="list-style-type: none"> ・主催講座は、普及講座（27回）と特別展開連講座（2回）、民家園伝統文化体験講座（3回）、どこでも博物館（3回）であり、地域講座数ともに目標をクリアすることができた。 ・受講者数については、博物館講座（普及講座、特別展開連講座）の他、民家園関連行事、どこでも博物館、教員のための博物館の日の参加者合計として4,106人となり目標を大きく上回った。 ・今後さらに、内容の充実と広報活動の工夫に力を入れながら実施していきたい。 	4		<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育支援は、相手の希望に従うので、充分努力されていると思う。博物館講座など、よく地域に開かれていると思う。猪八重溪谷での散策など、本当によい計画だと思う。民家園は、あるだけでもとてもいいなあと思っている。（散歩に行っても見ることができるので）それを活用してのいろいろな行事は、すばらしいと思う。関係機関との連携は、忙しい中、すばらしいと思う。展示を見る時に説明していただけるだけでも関心を深めることができた。 	
	地域講座	年10回	12回					
	受講者数	年1,500人	4,106人					
④民家園の活用	民家園まつり	年1回	1回	<ul style="list-style-type: none"> ・3月に民家園春まつりと民謡の公演を、2月に高鍋神楽を実施し、多くの方々に来ていただき、大変好評であった。 ・毎週第3土曜日に開催している宮崎の昔話公演は、目標の10回を開催し、子どもから大人まで幅広い年代層に楽しんでいただいた。なお、宮崎の昔話公演は、語り部の高齢化に伴い新たな担い手を開拓する必要があるため、情報を収集していきたい。 ・その他の催事として、福祉施設と共催で風車フェスタ（7月）、愛好会と共催でレコードコンサート（10月）の他、民家園ボランティアによる昔の道具体験（4回）を実施することができた。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育支援の実績の数値は、平成27年度より学校受入校数、資料貸出し数とも増えてきているのは、博物館の取組みが周知されてきた結果であると思う。今後も魅力的な職員研修プログラムの実施や積極的な学校への情報発信を期待したい。 ・展示解説員の方の解説（説明）がとても分かりやすかった。特に小学校低学年向けの言葉が分かりやすく、児童も集中して聞き入っていた。日南や都城、日向や延岡方面からの来館児童、生徒がもっと増えるためには、どうしたらよいか。 ・展示解説については、目標値をやや下回っているが、実績としては評価できるのではないかと。展示解説員制度や解説員の活動内容などをアピールすべきである。 	
	伝統芸能公演	年1回	2回					
	宮崎の昔話公演	年10回	10回					
	その他の催事	年6回	6回					
⑤関係機関との連携	職員の派遣・招聘	年20件	106件	<ul style="list-style-type: none"> ・民俗、歴史、地質、教育普及など様々な分野の研究会や会議に講師や委員として職員を10件派遣し、研修者等の招聘が3件あった。資料貸出し及び資料借用または展覧会等で協力を得た関係機関は73件、視察・調査等で来館された関係機関17件あり、連携を図った。 ・串間市・高鍋町・日之影町各教育委員会と共催で普及講座を3件実施した。 	4		<ul style="list-style-type: none"> ・博物館が主催する講座のチラシや新聞等での広報を見ると、興味をひく講座が目につくようになってきている。受講者数が目標を上回っていることからそれがわかる。 ・民家園の活用については、神楽の公演等民家園を活用して、いろいろな企画をされていることは評価できる。 	
	資料の貸し借り							
	研究会への参画							
	共催事業等							
⑥博物館と福祉施設の連携	施設受入件数	年200件	286件	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症高齢者を対象に平成27年度から実施している、解説員がコーディネーターとなった「博物館で思い出を語ろう！」事業の効果（延べ88回実施）等により、福祉施設の受入れ件数の目標を上回ることができた。 ・今後も、福祉施設のニーズを踏まえて事業展開を図っていく。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関との連絡については、実績が目標値を上回っており、評価できる。 ・博物館と福祉施設との連携については、利用状況を見ると、放課後等デイサービス事業所の利用が多い。障がいのある方達が利用している施設・事業所等との連携を進めていただきたい。 	
⑦レファレンス対応	相談件数	年1,000件	803件	<ul style="list-style-type: none"> ・一般466件、マスコミ187件、公共機関64件、学校33件等からの相談が計803件あった。相談件数の目標値は達成することができなかったが、昨年度より目標値に近づくことができた。 ・ホームページなどを通じて、レファレンスサービスの周知を図り、問い合わせには迅速かつ適切に対応していきたい。 	2		<ul style="list-style-type: none"> ・レファレンス対応については、昨年度より実績数も215件増えており、ホームページ等を活用しての県民への周知への取組が相談件数に結びついていると考える。 ・研究発表会の開催については、県内の研究団体の発表会を企画していることを評価するが、一般の参加者が増えることも期待したい。 	
⑧研究発表会の開催	研究発表会	年1回	1回	<ul style="list-style-type: none"> ・県内研究団体の発表会を3月に開催し、自然史系の8団体が報告を行った。参加者は昨年度より増えて69人となり、団体同士の連携と情報交換を行うことで、研究のレベルアップを図るとともに、県民の自然への関心を高めることができた。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ・研究発表会の開催は、貴館ならびにスタッフがイニシアチブを取って継続していることは、高く評価したい。 	
⑨博物館友の会との連携	講師派遣（博物館→友の会）	年5回	講師派遣5回	<ul style="list-style-type: none"> ・学芸課職員の講師派遣は、特別展の学習会（3回）、学芸員講座（1回）、バスツアー講師（1回）の計5回実施した。 ・また、友の会会員による博物館講座支援は、「春の猪八重溪谷で森林浴」など4回あった。 ・平成29年度も、講師派遣や講座支援など双方向での支援を予定しており、このような機会を通して、友の会との連携をさらに深めていきたい。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ・博物館友の会との連携については、友の会の活動を広く広報することで、会員も増えさらに互いの活動が充実するのではないかと。 	
	講座支援（友の会→博物館）		講座支援4回					
	計9回							

(5) 情報発信

項目	評価指標		28年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価・改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①情報発信の充実	広報紙発行	年2回	2回	<ul style="list-style-type: none"> ・広報誌「森の通信」を6月と12月の2回(60号・61号)発行し、県内の学校や博物館、図書館、公民館等の公共施設などに配布するとともに、ホームページにも掲載した。 ・博物館の情報を報道機関に提供する報道処理は47件、報道機関からの問い合わせに対する情報提供は211件の計258件であり、目標値を大きく上回ることができた。 	4	3	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信の充実については、現在の評価基準に照らして、適切な情報発信が行われていると認められるが、情報発信は博物館の利用促進にとって、極めて重要な方策であるので、さらに、効果的な発信に努めていただきたい。 ・年2回の博物館だより「森の通信」の発行、また「はくぶつかんカレンダー」など内容も豊富で見やすく、努力の跡がうかがえる。ホームページの年47回の更新とともにSNS開設により、情報発信がさらに可能となり、アクセス数が目標値を上回ることができたのは、評価に値する。 ・限られた予算の中で、マスコミへの情報提供やSNSを活用した情報発信を行うなど、様々な工夫をしながら取り組んでいる。今後も、博物館の役割の重要性を認識しながら、効率的、効果的な情報発信に努めて欲しい。 	3
	報道処理・情報提供件数	年120件	258件					
②ホームページの充実	更新回数	月5回	月3.9回	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館ホームページへのアクセス数は、年509,579件となり、目標値を達成することができた。これは平成28年度7月からSNS(facebook, twitter)の開設により、特別展や講座の様子、季節ごとの情報などを適宜発信できるようになったことが要因の一つと思われる。 ・なお、年間の更新回数については目標に達しなかったものの、新着情報の提供を中心に年47回実施し、こまめな更新に努めた。 ・引き続き、ホームページの新着情報での情報提供、SNS(facebook, twitter)を利用した情報発信を継続して取り組んでいきたい。 	2	3	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信の充実については、現在の評価基準に照らして、適切な情報発信が行われていると認められるが、情報発信は博物館の利用促進にとって、極めて重要な方策であるので、さらに、効果的な発信に努めていただきたい。 ・年2回の博物館だより「森の通信」の発行、また「はくぶつかんカレンダー」など内容も豊富で見やすく、努力の跡がうかがえる。ホームページの年47回の更新とともにSNS開設により、情報発信がさらに可能となり、アクセス数が目標値を上回ることができたのは、評価に値する。 ・限られた予算の中で、マスコミへの情報提供やSNSを活用した情報発信を行うなど、様々な工夫をしながら取り組んでいる。今後も、博物館の役割の重要性を認識しながら、効率的、効果的な情報発信に努めて欲しい。 	3
	アクセス件数	年500,000件	509,579件					

(6) 経営

項目	評価指標		28年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価・改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①博物館協議会や県民の意見の尊重	アンケート収集件数	年2,000件	1,831件	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの収集件数については、目標値をクリアすることができなかったものの、本館のサービスに対する満足度は82%と目標を達成できた。また、アンケートの意見欄に記された施設利用等に関する要望のうち、実施可能なものは迅速に対応できた。 ・今後はアンケートを実施する機会を増やす工夫を行い、利用者の意見収集に努め、館の運営に生かしていきたい。 	2	3	<ul style="list-style-type: none"> ・来館者アンケートから本館のサービスに対する満足度も目標を達成できており、努力がうかがえる。今後さらに様々な年齢層のアンケートならびに回数を増やして運営の改善に活かして欲しい。地震を想定した避難訓練や防火訓練が行われており評価に値する。今後さらに南海トラフによる地震や津波に対する観客の誘導や文化財等資料に関する管理体制の強化にも努めて欲しい。 ・アンケートは、利用者の博物館に対する感想や評価を把握する数少ない手段であるため、収集件数を増やす努力をしていただきたい。また、博物館の基本は人材であり、全職員を対象とした基本的な研修や学芸員、展示解説員の資質の向上のための研修を充実させていることは評価したい。 ・職員の資質の向上に関して、文化財の保存管理や標本作成などの博物館の業務に直結する研修に参加されていることは評価できる。今後は学術的な研究レベルを向上させる研修も設けられることを期待する。それが貴館の調査研究のレベルを上げ、成果を充実させて、県民にも反映されることにつながる。外部機関の研究助成金の獲得などにも積極的に取り組んでいただきたい。 	3
	満足度	70%	81.8%					
②職員の資質の向上	研修機会の確保	—	<ul style="list-style-type: none"> ①基本研修 ②県外研修等 ③展示解説員研修 	3	3	3		
③危機管理体制の強化	防災訓練	年2回	3回	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初の4月に、全職員を対象に危機管理マニュアルに基づき危機事象への対処方法や消火器を使用した消火活動等の防災・防火研修を、9月には、「防災の日」に合わせ、宮崎北消防署の指導のもとに、震度5強の地震を想定した避難訓練を、1月には、民家園において「文化財防災デー」に合わせた防火訓練を宮崎北消防署や宮崎神宮とともに実施することにより、職員の危機管理意識やスキルの維持・向上を図った。 	4	3	3	